

論文

1 讀離騷

嗚乎。傷哉。讒人罔極也。屈原之事君也。可謂忠矣。而讒人間之。遂沈汨羅。余讀離騷。其辭悽愴而怨。其言婉雅而憂。呼天一聲。心腸寸斷。不覺流涕交頤也。凡人處順境也易。處逆境也難。如原之所處。可謂極難矣。而論者或曰不必死。或曰其死也遲。何論之容易也。噫嘻嗚呼。原之胸懷。誰語誰明。當時之人。誰知之者。後世之人。誰知之者。吁乎。嗟乎。可哀矣哉。余少也孤。落魄於彼。飄泊于此。飽歷世路之峻層。屢遇人情之反覆。當患難迫身。苦辛切體。欲語無語。欲告無告。他人不知痛痒者。非唯不悲之。反謔浪笑傲。況原之苦辛。非余之比。自非身罹憂患。親嘗辛苦者。焉能知其胸懷乎。於戲。余生千載之後。讀離騷而悲之。誰復於千載之後。知予之所以悲。而悲之者嗚乎。

此篇係二十三歲作

釈文

離騷を讀む

嗚乎。傷しきかな。讒人（告げ口をして人を陥れる）は罔極（きわまりがない）なり。屈原之れ君の事なり。忠

を謂う可し。讒人にこれを問わずして遂に汨羅に沈む。

余は離騷を讀んで其の辭の悽愴して怨む。其の言婉雅にして憂いは一聲天を呼ぶ。心腸寸斷涕は頤

に交も覺えず流れる。凡人（普通人）順境に處し易しところ。逆境また難し處また屈原の所處の

如く。極難を謂う可し論ずる者は曰う必死せず。或は曰う其の死また遲しと、何んぞ論は之れ容易な

り。噫嘻。嗚呼。屈原の胸懷誰か語りて誰に明さん。當時の人誰が之を知る。後世の人誰が之を知

る。吁乎。嗟乎。哀しむ可し。余は少きより孤なり。魄を彼において落さん。泊るこれ飄りて。

歷世峻層（山の峻しいさま）に飽き、屢ば人情の反覆に遇い、患難（憂い、悩み、難儀）身に迫るに當り苦辛切

にして體語らんと欲するも語無く、告げんと欲するも告る無く、他人に痛痒（痛みと痒み）は知らず。唯

だ之を悲しまずに非らずしまずに（悲しむ）。反讒して浪笑傲るも、況んや屈原の苦辛余の比に非らず、

非らずより身は憂患に罹り、親しく辛苦を嘗るは能く其の胸懷を知る。

余千載せんざいの後にも離騷りさうを讀んでて之を悲しむ。誰復た千載せんざいの後に。予之れを以て悲しむ所を知る。之を悲しむ嗚乎ああ。

（此篇二十三歳のものと推定）

〔解説〕

屈原（前三四〇 - 二七〇）は中国最初の大詩人。名は平へい、字は原げん。あるいは名は正則、字は靈均れいきんだとも云う。戦国時代の末、楚國の貴族の家に生まれ、懷王及び頃襄王けいじやうに仕えて三閭大夫さんりよ（昭、屈、景の三氏に司る）の官名になったが、讒言に逢つて放逐され、洞庭湖の辺りを流浪すること多年遂に絶望の果てに汨羅江へきわに身を投じて死ぬ。「楚辞」と呼ばれる朗誦体の詩は彼の創始になったもので後世の詩に絶大な影響を与えた。代表作は「離騷」「九歌」「天問」「九章」など。

「離騷」は憂いに遭う、あるいは別離の愁いの意。全篇九十三節、二千五百字に近い長編自叙伝詩である。

語釈

離騷りそう＝楚辞の編名、戦国時代、楚の屈原が王から信任されない憂いを述べたもの、離は罹、騷は憂いで、憂いにあうという意、一説に、追放された國から離れる憂いを述べたものという。嗚乎ああ＝感嘆詞。傷いたし哉や＝悲しく思う。讒人ざんにん＝告げ口をして人を陥れる。罔ぼう＝網、にんを束縛する、道理に合わないことを強いる。屈原くつげん＝楚の人、楚王の一族、楚辞の代表的な作者として有名。汨羅べきら＝屈原が身を投げて自殺した所。辭じ＝言葉。悽愴せいそう＝悲しみ傷む、寒さがひどく身に沁みる。怨えん＝怨む、恨めしく思う。婉雅えんが＝美しく淑やかで雅やか。憂ゆう＝憂う。心腸しんちやう＝心臓や腸。寸斷すんだん＝一寸刻み。流涕りゅうてい＝涙を流す。頤交いこう＝顎を振るわせて、顎をしゃくり上げる。順境じゆんきやう＝順調な幸せな境涯。逆境ぎぎきやう＝逆に不幸な境涯。噫い＝嘆息の声、驚嘆の声。喟き＝感嘆詞、恨み悲しむ声。原げん＝屈原。胸懷きやうかい＝胸中、胸の中の思い。吁う＝憂いのときの声。嗟さ＝感嘆または嘆き悲しむ声。魄はく＝魂、精神、人の肉体を主宰する陰の生気で、死後地上に留まる。飄ひょう＝風に吹かれ、ひらひらと漂う。歷世れきせい＝歴代の世。峻層じゆんそう＝峻しい山の層、峻しい。飽ほう＝飽きる。屢る＝屢々。人情にんじやう＝人の情け。反覆はふふく＝繰り返す。患難かんだん＝患う難儀。苦辛くしん＝苦さと辛さ、大変な苦勞。體たい＝身体。痛痒つうやう＝痛さと痒さ。反はん＝反対に。譁浪ぎやうろう＝戯れる、巫山戯る。笑傲せうたう＝あざ笑って威張る。患懼かんり＝病気に懼る、患う。辛苦しんく＝辛さと苦さ、大変な苦勞。嘗なめ＝味あつ、嘗て。戯たわむ＝戯れ＝おもしろく遊ぶ。千載せんざい＝千年。

2 讀隔靴論

詩曰。夷狄是膺。荊舒是懲。蠻夷猾夏。自古而然。々其毒天下。未有如洋夷之甚焉。夫洋夷之蠶食四方也。貪饕無厭。恃巨艦以猖獗。恃大礮而陸梁。耶教以誘之。財利以懷之。倏而來。忽而去。于西于東于南于北。無有定處。其為害。豈可勝數乎。是隔靴論之所以作也。滿清有洋夷之禍。自澳門居夷始。故首論之。蓋鹽氏之微意。於是乎可見矣。大抵庸人之情。苟且偷安。日又一日。及事成禍起。救之既晚矣。然則此僅々一小冊。關係天下大事者。不鮮少也。但恐讀者以為一場之談也。則為碧眼紅毛所辦其髮左其衽矣。

二十八歲作

積文

隔靴論を讀む かつからん よ

(隔靴論を讀む) かつからん よ

詩に曰う。戎狄是れ膺(征伐) じゅうてき よう 荊舒 けいじょ (荊は楚の國、舒は今の安徽省の辺りに在った國でどちらも周王朝初期には南方の異民族の國とされ

た）是れ懲す。蠻夷夏に狙つ（野蠻で悪賢い）。古より然り然るに其の天下に毒なる。未だ洋夷の甚だし
きたる如くに有らずとも夫れ洋夷の四方に蠶して食す。貪饕（凶悪者の例え）を厭する無し。巨艦を恃み以
て狙撃は大礮を恃みて陸梁（暴れ走り回る）耶教を以て之に誘う。財利は以て之を懷にする。倏に
して來たりて忽ちとして去る。西より南より北より東に、定處有りや無しや。其れ害を為す。豈數に
勝る可し。是れ隔靴論これを以て作す所滿清洋夷の禍有り。澳門（広東省に在る港都市でポルトガル領になっていた）
夷が始めて居してより。故にこの論が首まる。鹽氏の微意（聊かの心使い）是れ於てああ見る可し。大抵
の庸人（普通の人）の情は苟くも且つ倫安（一時のがれ）日又一日事成りて禍を起すに及ぶ。之を救うには既
に晩きかな。然れども此の僅々（僅かばかり）一小冊係わりて、天下の大事に關すること鮮少（少なくない）せ
ず。但だ恐れるは讀者を以て一場の談りとして。其の衽を左に其の髪を辮て碧眼紅毛を為すを。（洋
服を着て長髪を分けて西洋かぶれを怖れるの意）

二十八歳の作

語釈

詩^し詩^し終^{しゅう}。 隔^{かく}韓^{かん}論^{ろん}。 靴^{くつ}を隔^{かく}てる論^{ろん}。 夷^い狄^{てき}。 胡^こ、夷^い、戎^{じゅう}、外国人^{がいこくじん}を蔑^{めつ}視^しした言葉^{ことば}。 膺^{よう}。 征伐^{せいばつ}する。 荊^{けい}舒^{じょ}。 周^{しゅう}王朝^{わうてう}の頃^{ころ}の二^に国^{こく}、南方^{なんぽう}の異^い民族^{みんぞく}の國^{くに}とされていた。 懲^{ちやう}。 懲^{ちやう}りる、懲^{ちやう}らす。 蠻^{ばん}夷^い。 野蠻^{やばん}な夷^い狄^{てき}、外国^{がいこく}人^{じん}を蔑^{めつ}視^しした言葉^{ことば}。 猾^{かつ}。 口^{くち}の短^{たん}い犬^{けん}、脅^{おそ}す、懼^{おそ}れる。 洋^{やう}夷^い。 西洋^{せいやう}の夷^い狄^{てき}、西洋^{せいやう}人^{じん}。 蠶^{さん}。 蚕^{さん}のよう^{よう}に喰^くい散^{さん}らす。 貪^{どん}饕^{たう}。 貪^{どん}る、貪^{どん}り、欲^{よく}張^{ちやう}りて遂^{つい}に求^{もと}める。 厭^{えん}。 厭^{えん}、飽^あきる。 巨^{きょ}艦^{かん}。 巨^{きょ}大^{だい}な軍^{ぐん}艦^{かん}。 恃^し。 恃^しむ、恃^しみにして。 猖^{じやう}獗^{けつ}。 勢^{せい}いが盛^{さか}んで荒^あれ狂^{きやう}う。 大^{たい}礮^{ぱう}。 陸^{りく}梁^{りやう}。 暴^{ばう}れて走^{そう}り廻^{まわ}ること。 耶^{じや}教^{きやう}。 邪^{じや}な教^{きやう}え、邪^{じや}な宗^{そう}教^{きやう}。 懷^{かい}柔^{じゅう}。 倏^{しゅく}。 犬^{けん}が早^{はや}く走^{そう}るさま、忽^いち、速^{すみ}やか。 豈^{あに}。 どうして、なんと。 滿^{まん}清^{しやう}。 滿^{まん}州^{しゅう}族^{ぞく}の清^{しやう}國^{こく}、清^{しやう}國^{こく}に充^みちる。 禍^か。 禍^かい。 夷^い居^い。 夷^い狄^{てき}が居^い住^ず。 蓋^{けい}。 思^{おも}うに。 鹽^{えん}氏^し。 微^び意^い。 僅^{けん}かな意^い志^し。 大^{たい}抵^{てい}。 大^{だい}方^{ほう}。 庸^{よう}人^{じん}。 普^い通^{つう}の人^{ひと}。 凡^い人^{じん}。 澳^い門^{もん}。 アモイ、広^{くわ}東^{とう}省^{しやう}の都^と市^しにある港^{かう}の名^な、一^い八^{はち}七^{しち}年^{ねん}以^い来^{らい}ポ^ポル^るトガ^がル^る領^{りやう}となつた。 苟^{こう}。 苟^{こう}も。 倫^{りん}安^{あん}。 秩^{しつ}序^{じょ}の安^{あん}定^{てい}。 晚^{ばん}。 遅^{おそ}い。 僅^{けん}々^{ぜん}。 非^ひ常^{じやう}に僅^{けん}かな。 一^い小^{せう}冊^{さつ}。 一^いつの小^{せう}さな冊^{さつ}子^し。 一^い場^{じやう}。 その場^{じやう}限^{げん}り。 碧^{へき}眼^{がん}。 青^{せい}い目^め。 紅^{こう}毛^{もう}。 赤^{せき}い毛^{もう}。 衽^{じん}。 襟^{きん}、おくみ。 左^さ所^{しよ}。 左^さ側^{せき}。 辮^{べん}。 辮^{べん}髪^{はつ}、清^{せい}代^{だい}の男^{おとこ}子^この髪^{かみ}型^{がた}。

某月某日。南部裕。再拜呈書青門先生下執事。先生今當要路。明良相遇。何欲不成致。君堯舜之上。何為難乎。小生幸生干明良相遇之時。欲學道行義。而不背名君崇天朝攘夷狄之精忠。立學弘道之道深意。是以不憚尊嚴。敢吐露情實。以祈先生之諒察。唯恐先生嫌無鄂々之風。而有唯々之態耳。頃者。官命繰連陳法。混洋夷法而用之。小生以為。雖卑賤如裕者。亦神州之民也。豈神州之民而為犬羊之奴隸可乎。夫吾君之所崇天朝也。天朝之所惡。所憾。所讐。所攘者。洋夷也。法其所惡。所憾。所讐。所攘之法。名其所惡。所憾。所讐。所攘者之名。公然而學洋夷。於義可乎。夫賤天朝之所賤者。惡天朝之所惡者。是崇天朝而敬吾君也。今也。重天朝所賤之洋夷以為師。學天朝所惡之洋夷以為法。棄我之服。服彼之服。變神州之風。化蠻夷之俗。無乃辱神州之國體乎。是以。苟學聖人之道。誦法孔孟者。當明聖人之道。以正華夷之分。而不甘為犬洋乃奴隸也。然則是崇天朝。而敬吾君。重中華。而抑夷狄也。夫若是乎。幾乎其為聖人之徒矣。此平生持此說。所以不立夷之下風也。及有今之命。以為。法夷此之法。名夷之名。以為犬洋之奴隸乎。則非道也。非義也。不崇天朝也。將不法夷之法。不名夷之名。不為犬洋之奴隸乎。則廢君命也。裕之進

退惟谷。因顧。君命固重。道義不輕。君命既重。天朝又重。不如以平生所持之說白官也。若以心之所不安者。阿諛順旨。是庸主之所不喜也。然則不獨以讒諂面諛之人自處。待名君以庸妄之主也。不敬莫甚焉。且名君良臣。不欲國中有阿諛無特操之人也。必矣。於是。十月廿四日。上書以辭入。綽練場學洋法。書達于今田君。君曰。忤旨或不可乎。龜尾文一。以君言告裕。裕曰。吾書辭無而意不達。吾今詳語吾意。夫人鼎鑊不可變者。道也。臨白刃不可易者。義也。苟離道棄義。則陷夷狄禽獸。故曰。道也者。不可須臾離也。有人于此。君命之曰。弑天子。天子不可弑也。弑天子非道也。君曰。殺而父。父不可弑也。父非義也。君曰。舍而所學聖人大中至正之道。學楊墨老佛天主之道。不可學也。學異端邪說非道也。由是觀之。非義非道。則雖君命。亦不可從也。然則天地自有一定之道。人物自有一定之義。天子不得不從焉。庶人不得不由焉。斯道也。則堯舜禹湯文武周公孔子之所傳。而吾之所學焉。尊周室而抑夷狄。春秋之法也。尊天朝而攘夷狄。神州之道也。故今學周孔者。當尊天朝抑夷狄。猶孔子之於春秋。痛正華夷之分。毫不假借也。孔子之作春秋也。諸侯用夷禮則夷之。今也不獨服夷服。法夷法。公然名夷名。曰西洋流。設使孔子筆于春秋。其謂之何。吾意。固非如火技者流。為洋和之辨。爭其長短也。欲正華夷之分。以行聖人之大道也。足下以吾言白今田君。君知吾欲行聖人之大道。豈不白官之理乎。方今良臣在上。如青門先生。則吾知其為人聰明公正。虛懷接

人。若吾言之是也。必喜曰。某之欲行古道也如此乃白吾君曰。某之欲行古道也如此。成其志以弘其道。吾君亦必喜曰。某之欲行古道也如此。不可使吾赤子為腥羶奴隸也。不得其當。雖十易之。不為病也。嚴然示華夷之分曰。禁學夷狄法然。則光明正大之道明乎上。而禮義廉耻之心興于下矣。若吾言之未盡善也。先生必哀其所不足曰。某之欲行古道也如此。不如白吾君成其志也。吾既知名君之志如彼。先生之為人如此。足下以吾言白今田君。豈有不白官之理乎。小生既告文一如此。又以為。吾上書揭大意。未悉其曲。不如以吾意詳白先生。先生察之。豈徒然而止哉。夫名洋夷名。法洋夷法。以華變夷。亂風俗。害名教。污神明之邦域。大略如向所陳。小生願終其說。伏惟。我神州開闢以來。未嘗受外夷之侮。而今及聖天子之躬。姦邪誤國。殆付社稷於犬羊。使神州坐陸沈宸衷之所憂。其苦痛何如也哉。苟為神州之民者。體宸意。敵王愾。痛哭流涕長大息。視洋夷猶讐敵也。而今之學洋夷者。公然名夷名。甘為犬羊之奴隸。恬不知恥。其亦何心哉。且也今之學洋夷者。以取長舍短為言。其言似公。實以成私。問其意則曰。彼器械精巧也。我不可敵也。夷不可攘也。不見毫有敵愾之意也。甚則遊說以稱彼美。使我士民生畏怖之心。故小生嘗曰。使吾在位。必自肅牆。何必碧眼紅毛而後為夷。夫學鄭聲者。其人必姪。好雅樂者。其人正。未聞操三弦其人不蕩者也。未聞學夷法其人不慕夷者也。是故。欲禁佛者。先人其人。火其書廬其居。而揭明道正教以道之。如此則可謂善

於禁佛者矣。苟不能如此。躬親簪其首。被袈裟。誦經。持念珠。戒人曰。雉髮省油梳。故吾取之。書則多奇言。故吾誦之。袈裟頗不俗。故吾衣之。念珠便下簪。故吾用之。如其道則異端也。不可用也。孰不笑其為亡人耶。故今之欲攘夷者。必先治根本。根本者何耶。人心是也。人心既夷。雖攘猶不攘。故不治根本而攘夷。猶追僧而不火經。夷之再來。幾何其不胥而為夷也。是故。今之治國家者。所宜先注心焉。危滿清洋夷之禍。非起於起之日。其禍已萌於康熙雍正之際。康熙雍正之際。唯知禁天主教。不知其他出於西洋者。一切禁絕之。故洋夷之邪說。暗壞人心。人心蠹蝕。既化為夷。其慕夷也久是以。及禍亂之起。一敗不支。朝廷雖有一二英傑如林則徐者。不能如之何耳。滿清覆轍。國家之所宜監焉。然則今之治國家者。如之何而化也。曰。其出西洋者。痛刈夷之。絕其本根。除其枝葉。正華夷之分。以明聖人之道。下令曰。西洋者夷狄也。覬覦之大賊也。神州之大讐也。服夷服。法夷法。名夷名。甘為羶之奴隸者。不敵王愾也。蔑天朝也。神州之民也。自今後。一切禁用夷法。苟下令如此。則華夷之辨。嚴然而立。人皆知夷之可賤可惡。而廉恥之心自生矣。既知廉恥。則人皆相語曰。吾神州是之民也。自有先王法服在。棄法服。服夷服。是叛天朝化夷狄也。神州自有神州陳法在。棄神州陳法。用洋夷陣法。是以華變夷也。且也以夷狄之名為名。公然語曰西洋流。甘為犬羊之奴隸。則污神明之邦域也。辱神孫之身體也。神州之身。而甘為犬羊之奴隸。神祖在

天之靈。其大州來攻。不足憂也。苟不能如此。用洋法。下令曰。彼服便操作。故吾用之。彼履利雨雪。故吾用之。彼陳法有寸長。故吾用之。為上者既棄我服。服彼服。屈膝犬羊。學彼法。低頭夷狄。講彼藝。覲然不愧。則為下者相告曰。西洋者夷狄也。而吾君師之。西洋者犬羊也。而吾大夫法之。西洋者天朝之大讐也。而君與大夫。皆師之法之。名讐名。名夷名。甘為犬羊之奴隸。君之與大夫之貴。旦不知恥。則吾儕小人。何所恥。如有洋夷來攻。全命而走耳。既已蔑天朝。而為彼奴隸。是無義無恥也。既已無義無恥。奉彼正朔固可。為彼屬國亦可。服彼服可。躡彼履可。學天主教亦可。弑君弑父。利于我。便于我。何所不為苟治國家者。棄禮義而貴便利。則其弊蔽。蓋乎此矣。是以。孟子之戒惠王。所以有上下交征利而國危之說也。是故。聖人之治國家也。必先正名明義。而勵之以廉恥。是以能使貧夫廉。懦夫立也。昔孔子忍渴於盜泉之水。曾參還車於勝母之間。皆惡其名也。古之聖賢。名之不美。猶且惡之。而今以神州之人。甘為腥羶之奴隸。吁亦可怪。且也今之洋夷。以奪人國家為事。蠶食四方不知厭。豈小盜哉。然則禁洋夷法。用神州陳法。則不立大盜大讐之下風。而名與義皆得宜。誰得而間然哉。夫國家之立陣法。宜正大。而不宜碎細。豈如洋夷碎細。而後為得矣哉。豈手足之所動。與鼓聲合。如娼妓舞。如俳優戲。飄々蕩々而後為得矣哉。且也兵機之妙。不可先傳。不在八陣也。不在六花也。如韓信者。驅市井小人。亦善戰。假使今之學洋陣者。精

鍊千日。豈能信驅市井小人者敵哉。設使孔明用六花陣司馬懿用八陳。孔明之勝也必矣。設使孔明用八陣。司馬懿用六花陣。孔明之勝也必矣。然則如孔明者。八陣亦勝。六花亦勝。如司馬懿者。八陣亦不能勝。六花亦不能勝。是知兵之勝敗。不在陣法之上矣。談兵拘拘乎陣法器械之末者。未可與談兵也。然則今之立陣法者。欲正而大。名義皆正。而不使人立洋夷之下風也。若如是乎。則滅洋學之勢焰於將熾。迴神州之美風於既頹也。若熾洋夷之毒焰。以害神州之正氣。不獨神州之罪人。抑亦孔門之罪人矣。小生之持此說也久矣。先生如以此說為然。則白吾君。一洗腥羶之風習。振興神州之正氣。正華夷之分。人崇天朝如鬼神。賤洋夷如讐敵。然則聖人之正道自行。而洋夷之邪說無由入焉。嗚乎。如此乎。吾君之豐功盛烈。千歲垂青史。無愧古之聖王明辟矣。此則先生之所宜勉。而小生之所以有深望於先生也。若多掣肘者。先生亦不能如之何乎則使小生遂其志。善其身是祈。雖然。如獨善其身。則固非小生之所欲焉。唯冀先生勉旃。袷恐懼再拜。

元治元年甲子所作時年三十四

釈文

青門先生の書に上るたてまつ

某月某日。南部裕書す。青門先生下す執事げいを再び拜して呈す。先生は現在かなめ要の路に當りて。明良相遇めいりようあいあうは。何んぞ致すを成さざらんと欲す。君は堯舜ぎようしゆん之れ上りて。何んぞ難がたを為さん。

小生幸いここに明良相遇めいりようあいあうの時に生き。義を行い道を學ばんと欲す。名君に背かず天朝を崇めて夷狄を攘い精忠の學びを立てて道を弘め深意是れ以て尊嚴に憚らず。敢て情實じようじつを吐露し以て先生の諒察りやうさつを祈す。唯だ恐れるは先生は鄂々がくがくの風唯々の態ていに有して。頃者けいしゃ。官命練りて法を陳べて繰つり。

洋夷の法に混まぜてこれを用う。小生以て為さん。卑賤ひせん裕如きと雖も。亦た神州の民なり。豈あに神州の民犬羊の奴隸どれいの為に可ゆるすや。

吾が君の崇とつぶ所は天朝なり。天朝に悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうものは洋夷よういなり。法の悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうは法なり。名なのその悪しき所いか愾あたとなるところ攘はらうは名なり、公然と洋夷を學び、義に於て可ゆるすや夫れ天朝に賤いやししき所は賤いやしき。天朝に悪しきは悪しき。是れ天朝

を崇^{あが}めて吾が君を敬^{うやまつ}うなり。今また。天朝に賤^{いやし}しき所の洋夷を重んじ以^{もつ}つて師^{おさま}めるを為す。

天朝に悪しき所の洋夷を學^{まな}びて以^{もつ}つて法と為す。我の服を棄^すてて彼の服を服^きて、神州の風を變えて、

蠻夷^{ばんい}の俗^{なづ}わしに化^{みな}す、無^{すなわ}して乃^{すなわ}ち神州の國體を辱^{はづかし}める苟^{いやく}も聖人の道を學^{まな}び。誦^{こうもつ}えて法は孔孟の

當に聖人の道を明^あす、以^{もつ}つて華と夷を分けて正し、犬洋の奴隸の為に甘んぜずは。然して則^{すなわ}ち天朝を

崇^{あが}め。吾が君を敬^{うやまつ}まい中華に重ねて。夷狄をそもそも。是^{こゝ}れ若^{ともが}き聖人の徒^{ともが}の為にそれ幾^{こゝ}う。此^{こゝ}れ

平生此の説を持^もしてるところ。以^{もつ}て洋夷の下風に立たず所なり。今の命^{いのち}有りて及び以^{もつ}て為^なす法の法

名は夷の名以^{もつ}て犬洋の奴隸則^{すなわ}ち道に非^{あら}ずなり。義に非^{あら}ずなり。天朝を崇^{あが}めずなり。將に夷の法を法と

せず。夷の名を名とせず。犬洋の奴隸に為^なさず。則^{すなわ}ち君命を廢^{すた}れるなり。裕のこれ進退して惟^{おも}うに谷^き

まる。因^よて顧^みみる。君命は固く重く。道義輕からず・君命既に重し。天朝は又た重し。以^{もつ}て平生の持

す所の説に如^しかずはここに官なり。若^しし以^{もつ}て心の安んぜずところは阿諛^{あゆ}順^{しん}う旨^{しめ}は。是^{こゝ}れ庸主^{ようしゅ}の喜ばず

所なり。然^{しか}ずるに則^{すなわ}ち諂^{てん}面^{めん}諛^うを讒^{そし}るは人の自^{みづか}の處名君を待^{まち}し以^{もつ}て庸妄^{ようわ}の主なり。敬^{うやまつ}まわす甚^{こゝろ}

しき莫^なれ。且^{かつ}つ名君良臣國中阿諛^{あゆ}あるを欲^ほせず特^{とく}繰^{そう}の人無^{みな}し必^{かならず}ずや是れより十月廿四日上書を以^{もつ}て以

て辭とし洋法を學ぶ繰練場に入る。

書をここに達して今田君曰く。旨に忤い或は可からずや。龜尾文一以て君は言い裕に告げて言つ。

裕曰く。吾が書辭蕪してを達せず。吾れ今詳しく吾が意を語る。夫れ鼎鑊に入れて變るは可からず

道は白刃に臨み易きは可からずは義なり。苟も道を離れ義を棄てて則ち夷狄に陷つは禽獸なり。

故にこ道なりは須臾も離る可らず。人有りて此れを君の命に曰く。天子弑して道に非ざるなり。

曰く父を殺して父を弑すは可からずなり。父を弑すは義に非ずなり。君に曰く舍は聖人大中正の道

を學ぶ所にして。楊墨老佛天主の道を學ぶ。學ぶは可からずなり。異端の邪說道に非らずを學ぶなり。

是れ由に之れ觀にて義に非ず道に非ず。則ち君命と雖も亦た従うは可からず。然り則ち天地自から一

定の道に有り。人物は自から一定の義有り。天子ここに従はずを得ず。庶人ここに由とせずを得ずと

も。斯の道なり。則ち堯舜、禹湯、文武、周公は孔子の傳つ所。吾れにしてこのここに學ぶ所周室

を尊ぶは夷狄を抑えて。なお春秋の法なり。天朝を尊び夷狄を攘うは神州の道なり。故に今の周孔

に學ぶは。當に天朝を尊び夷狄を抑えて猶お春秋よりの孔子の痛く華夷を分けて正し。毫して借り

は假にもぜずは孔子の春秋に作りなり。

諸候則ち夷の夷禮を用いて。今獨りならず夷服を服て法は夷法を公然と夷名を名し。曰く西洋流はと春秋に孔子の筆をして設け、それ謂うにこれ何んぞ。吾が意に固く火も技も流すの如きに非ず。洋和の辨えを為し。其の長短を争つなり。華夷を分けて正さんと欲す。以て聖人の大道を行なうなり。足下以て吾は言うを今田君に白す。君は吾が行わんと欲すを知らん聖人の大道豈白す官の理有らん。方に今良臣上る在り。青門先生の如く。則ち吾れ其の人の聰明公正を為すを知る虚懐人に接し。若し吾が言の是なるは必ず喜びて曰く。某は古道を行なわんと欲するは、此の如し乃ち吾が君に白して曰く。某の古道の行なわんと欲すなり此の如き。其の志を以て其の道に弘きを成す。吾が君亦た必ず喜びを曰く某は古道を行わんと欲すなり此の如き。腥羶の奴隸に為すは吾れ赤子を使しても可からず。其れ當に得られず十たび之れ易きと雖も病を為さず。嚴然と華夷の分るを示しここに。夷狄法を學ぶを禁じて然り則ち光明正大の道明らかにすることを上る。

禮義廉耻の心興りてここに下す。若し吾れの言未だ盡さず善きなり。先生必ず其の所に哀しみ足ざる

を曰く。某はその古道を行なわんとを欲すは此の如き。吾が君に白すに如かず其の志を成す。吾れ既に名君の志彼の如きを知る。先生これ人の為に此の如く。足下以て吾れは言う今田君に白す。豈官の理を白せず有り小生既に文にして告ぐ一たび此の如く。又た為を以て吾れ上書して大意を掲げ未だ其の曲りを悉さず。如かず以て吾が意を詳しく先生に白す。先生之れを察して豈徒然止まる哉。夫れ洋夷の名に名す法は洋夷の法華を以て夷に變じ。風俗を亂し害して名す神明の邦域を汚す。大略陳る所に向うが如し小生の願ひ其の説に終る。伏て惟れ我が神州開闢以来未だ嘗て外夷の侮を受けず。今に聖天子の躬に及んで姦邪國を誤り。殆ど社稷は犬羊に付す。神州坐して陸沈使しむ宸衷の憂る所。其の苦痛何如なり哉。苟も神州の民を為すは宸意を體し。王に敵するを愾り痛哭流涕長く大息す。當に洋夷猶お讐敵なるを視る今、洋夷を學び公然と夷名を名し。甘んじて犬羊の奴隸と為るを恬んじて恥を知らず。其れ亦た何んたる心哉。且つまた今この洋夷を學ぶは。長い舎を取して短かく以て言を為す。其の言は公を以て實に私す。其の意に問うは則ちここに彼の器械精巧なり。我が敵なるは可からず。夷攘は可らずなり。毫も敵愾の意の有るを見ず。甚だ則ち遊説以て

彼は美なるを称す。我が士民畏怖の心を生じせしむ、故に小生嘗て吾をして在位攘夷必ず蕭牆より
何んぞ必ず碧眼紅毛後にして夷を為す。夫れ鄭聲を學ぶは其の人は必ず婬、雅樂を好むは其の人を必
ず正し未だ聞かず。三弦を操る其の人は蕩せずと未だ聞かず。夷法を學ぶ其の人の夷を慕はずと。是
れ故に佛を禁ぜんと欲す先人其の人。火してその書其の居は廬、明道正教を掲げて以て之れを道とし。
此の如く則ち謂う可し善き佛を禁るより。苟も此の如くは能はず。躬は親の其の首を髡りて。袈裟
を被い。經を誦え念珠を持して人を戒めてここに。雉髮油を省いて梳る。故に吾れ之れを取り書し
て則ち奇言多し。故に吾れ之れを誦えて袈裟頗る俗せず。故に吾れ之れ衣念珠便ち簪に下る。
故に吾れ之れを用いて。其の道則ち異端の如きなり。用いる可からず。孰れ亡人其の為に笑はず。故
に今之れ夷攘わんと欲するは必ず先ず根本を治め。根本は何耶。人心是なり。人心既に夷攘うと雖も
攘はず故に根本を治めず夷攘い猶お。火せずして僧を追う夷は再び来たりて。幾何其れ夷の為に胥せ
ず。是れ故に今の國家を治めるは先ず心を注いで宜しき所、焉んぞ滿清洋夷の禍起こすに非ず起る
日に於て。其の禍は康熙雍正の際に萌える。康熙雍正の際だ唯天主教禁ずるを知れ知らず。其の他

西洋より出ずるは一切之れを禁絶し、故に洋夷の邪説暗に人心を壊し人心を蠹蝕既に化して夷を為す。其の夷を慕う久しく是れ以て禍亂の起るに及ぶ。一たび敗れるを支えず。朝廷一二英傑を有すると雖も林則徐の如くは則ち之れ何んぞ能はずが如く。満清覆轍國家の監に宜しき所なり。然るに則ち今の國家を治むるは之れ何んの如きして可なるや、ここに其の西洋を出ずるは痛く夷を刈り。其の本根を絶して其の枝葉を除き華夷を分て正し以て聖人の道を明かし。令をここに下し西洋は夷狄腥羶の奴隸と為すは王愾敵せず。天朝を蔑にするは神州の民に非ず。今より以て後に一切夷法を用うるを禁じ。苟も此の如き令を下して則ち華夷を辨て。嚴然と立して人は皆夷の蔑可し悪しき可しを知れ。廉恥の心自から生じ既に廉恥知り則ち人は皆相語りてここに。吾れ是れ神州の民なり。自から先の王法の服が在るに有りて。法服を棄てて夷服を服て是れ夷狄に化けて天朝に叛らうものなり。神州自から神州の陳べる法の在るを有す。神州の陳べる法を棄てて洋夷の陳べる法を用うるは。是れ華を以て夷と變えるなり。夷狄の名を名して以て公然と号して、西洋流に甘んじて犬羊の奴隸と為す。則ち神明の邦域を汚し。神孫の身體を辱める。神州の人神孫の身を甘んじて犬羊の奴隸と為す。

神祖^{しんそ}在りて天の靈其れ是れ何を謂^{おも}う、相戒めて犬羊の奴隸に為すを以て恥と為す、則ち自から固め國脈自から盛んになる、則ち五大州挙げて来攻は憂えるにに足らず。苟も此の如きに能わず洋法を用うる。令^{おきて}を下しここに彼服操作して便^{すなわ}ち故に吾れ之れを用うる。彼の履^{くつ}は雨雪に利して故に吾は之れを用いて。上^{たてまつる}るを為すは既に我が服を棄て。彼の服を服^きて屈して犬羊に膝し。彼の法を學び頭を夷狄に低れて彼の藝を講じ。覲^{てんぜん}然として愧^{はじ}ず。則ち下者に為る。相告てここに西洋は夷狄なり。吾が君これめる西洋は犬羊なり。吾れ犬羊の法に西洋は天朝の大讐なり。君は大夫と共に皆之れ師^{おそ}め之の法讐名に名し。夷名に名して甘んじて犬羊の奴隸に為す。君の大夫と之れ責^{あした}び旦に恥を知らず。則ち吾が儕^{ともがら}は小人何れも恥る所。洋夷来攻有するが如きは。命を全^{まっとう}して走るのみ。既に己に天朝をに蔑^{さげ}すまして彼の奴隸に為す。是れ義無く恥無く既に己に義も無く恥も無い。彼の正朔に奉ず固^{こか}可彼の屬國と為すも亦た可なり。彼の服を服^きて。彼の履^{くつ}を躡^はいて可なり。天主教を學ん可なり。君を弑^{しい}して父を弑^{しい}して。干^{かんが}我に利、干^{かんが}我便^{すなわ}ち何する所を為す。

苟^{いやしく}も國家を治むるに禮義を棄て便利を貴ぶは。則ち其の弊蔽^{へいへいふた}蓋をしてここに至る。是れ以て惠王孟^{けいおう}

子の戒め^{いまし}上下交りて利を征^とる。國危の說以て有する所是れ故に聖人の國家を治める、必ず先の名を正し義を明し。之れに勵み廉恥^{れんち}を以て是れ能く貪夫廉^{どんふれん}を使しむ懦夫^{だふ}は立つなり。昔孔子^{こうし}渴いて盜泉^{とうせん}の水を忍び。曾參^{そうさん}は車にて勝母^{しょうぼ}を間に還えす皆其の名を悪^あしきなり。古の聖賢^{せいけん}之の名美せず。猶お且つ之れは悪^あし。今神州の人を以て甘んじて腥羶^{せいせん}の奴隸に為す。吁亦た怪しむ可し且つ今の洋夷人の國家を奪い以て事と為す。食四方に蚕して屨^あきるを知らず、豈小盜^{かな}哉然るに則ち大盜大讐の下風に立たず、名は義と皆宜^{ただ}しく得る誰れ而て間然^{かんぜん}哉。夫れ國家の法を陳べて立ち正大に宜^{ただ}す。碎細^{さいさい}は宜^{ただ}しからず。豈洋夷を碎細^{さいさい}の如く後に得るを為す哉。豈手足の動く所鼓聲^{こせい}と合して娼妓舞^{しょうぎ}の如し。俳優^{はいゆう}の戯れの如し。飄々^{ひょうひょう}蕩々^{たうたう}として後に得るを為す哉。且つまた兵機^{へいき}の妙先に傳^{つた}うる可からず。八陣に在らず。六花に在らず。韓信^{かんしん}の如くは市井^{しせい}小人^{こじん}を驅ける亦た善戰する。假に使^せしむ今の洋陣を學ぶは精鍊千日豈能く信^{しん}の市井^{しせい}小人^{こじん}は敵者^{かな}哉。設して孔明^{こうめい}六花の陣を用^{もち}う司馬懿^{しばい}八陣を用^{もち}う。孔明^{こうめい}の勝なるは必ずや説いて孔明^{こうめい}八陣を用^{もち}う。司馬懿^{しばい}六花の陣を用^{もち}う。孔明^{こうめい}の勝なるまた必ずや。然り則ち孔明^{こうめい}の如くそれ。八陣は亦た勝つ。六花は亦た勝つ。司馬懿^{しばい}如くそれ。八陣は亦た勝つ能はず。六花は亦た勝つ能

はず。是れ知る兵の勝敗を知る陣法の上に在せずや。兵を談り拘えて陣法の器械の末に拘まるは兵を談るに可からず。然して則ち今の陣法に立ちては正に大ならんと欲す。名義皆正にし洋夷の下風に立ちて人を使しめず。若し是れの如き則ち洋學の勢焰將に熾んなるより滅す。

神州の美風を既に類れ廻るなり。若し洋夷の毒焰に煽られて以て神州の正氣を害い。獨りならず抑そも亦た孔門の罪人なり。小生此れ説を持して久しきや。先生此の説然りと為して以て則ち君ここに腥羶の風習を一洗興して神州の正氣を振り正に。華夷を分けて使して人の天朝を崇び鬼神の如き。洋夷を賤さは讐敵の如し。然るに則ち聖人の正道自から行ない。洋夷の邪説を由無く入れられぬ。

嗚乎。此の如き。吾が君の豐功盛烈は千歳の青史に垂る。古の聖王辟に愧る無し。此れ則ち先生の勉むるを宜しき所、小生これ先生よりの深望有し以ての所、若し掣肘多く先生亦た何んぞ之の如き則ち小生其の志を遂し使めて。獨り其の身に善く則ち固く小生の所に非らず欲せんとす。唯だ冀わくは先生旃に勉められん。裕恐懼して再拜す。

元治元年甲子所作時年三十四歳

語釈

執けい＝ひざまずいて。勢いきい、植うえる。葬さう舜しん＝堯と舜の二帝あり人徳広く天下に行われた。情じやう實じつ＝実状。諒りやう察さつ＝推察し了解する。鄂がく々かく＝率
 直に意見を述べて論争する。卑ひ賤せん＝身分の低いやしい。豈あに＝どうして、ねがう。奴ど隸れい＝しもべ、下男、昔戦争で捕虜になったり、刑罰を受けたり売買
 されたりして、自由を認められず強制労働をさせられた人。崇あがめ＝崇拜、敬つ。愾き＝ため息、いかる。讐しやう＝仇、敵。攘じやう＝払う。洋やう夷い＝西洋の胡、戎
 夷。賤せん＝いやしい。蠻ばん夷い＝野蛮な胡、戎。夷。辱はづかしむ＝屈辱。苟いさしくも＝かりそめにも、もしも、いささか。孔くわん孟めい＝孔子と孟子。谷こく＝谷、窮まる。阿あ諛ゆ
 「おもねり、へつらう、こますり。順じゆん旨し＝趣旨に従う。庸よう主しゆ＝平凡な君主。讒ざん諂たん＝他人の悪口、告げ口を言つてへつらう。面めん談だん＝面と向かつておもねる、
 へつらう。庸よう妄わう＝平凡な嘘、出鱈目、妄りに。特とく繰く＝何時も固く守つて変わらない境。龜き尾び＝亀の尾。辭じ無む＝乱れて整わない言葉、自分の言葉や文章を
 謙遜けんそんして言ふ。鼎てい鑪ろ＝足の無い大釜、昔人の刑罰で釜ゆでにした。弑し＝臣や子が主君や、親を殺すこと、目下の人が目上の人を殺すこと。楊やう墨もく＝戦国時
 代の思想家とのこと、楊朱は個人主義、墨翟は博愛主義を唱えた。異い端たん＝正当でない教え、聖人の道でない別の学説。邪じや説せつ＝正道に背いた説。文ぶん武ぶ＝西
 周、春秋時代の文公、武公周公。孔こう子し＝儒学の始祖。周しゆう室しつ＝周の王室。春しゆん秋しゆう＝春秋時代。聰そう明めい＝聴いたり見たりすること、耳や眼が聡いこと、道理
 に明あきらいこと。公こう正せい＝社会の秩序を正す、公平に。虚きやう懷かい＝心に蟠りがないうこと。腥せい羶じやう＝生臭い。嚴げん然ぜん＝厳しいさま。禮れい義ぎ＝礼と義、人が実践において守
 る正しい道。廉れん耻ち＝心が正しく欲がなくて、恥を知る。悉しつく＝全て、皆。邦ほう域ぎ＝國境、国土の区域。開かい闢ひく＝天地の開け始め、世界のはじまり。嘗かつ
 「試みる、ひいて、これまでに、以前。姦かん邪じや＝よこしま、悪人。社しゃ稷しやく＝土地と五穀の神、古代のてんし、諸侯は、此の二神を宮殿の右に宗廟を左に祀
 り、国家の重要な守り神とした。陸りく沈しん＝陸地に沈む、人が世の中で姿を隠してること、世が乱れ亡びること、頑固で世の中の移り変わりを知らないこと。
 宸しん衷しゆう＝天子の苦衷。宸しん意い＝天子の意志。痛いた哭く＝激しく嘆く、泣く。流りゅう涕てい＝涙を流す。長ちやう大だい息しつ＝大きなため息。毫ごうも＝少しも、僅か、細かい。畏い怖ふ＝
 畏れる、恐れ憚る。蕭しやう牆きやう＝門の内、垣根の内、身内。碧へき眼がん＝青い眼。紅こう毛もう＝赤毛。鄭てい聲せい＝周の一諸侯が建てた國で淫らな音楽が流行したので淫らの意
 に用つ。姪いん＝淫ら。雅が樂らく＝昔の正しい音楽、上品な音楽。蕩たう＝しまりがないう、みだす、やぶる、おぼれる。廬ろ＝家。躬み＝身体、みずから。髡こん首しゆう＝頭を剃
 る、坊主頭、髪を剃り落とす刑罰。袈け裟さ＝僧衣、肩から懸けて衣の上を被つ物、法衣。誦じゆ＝唱える。念ねん珠しゆ＝念仏の時手にかける数珠。雉ち髮はつ＝髪型。油ゆ梳しゆ

髪を油で梳く。籌さし数取り、数を数える竹の棒。孰しやくいずれ。腥羶せいぜん生臭い。禍わざはひ禍。康熙こうしん清朝第四代の帝。雍正ようせい正しく助ける、抱く、和らぐ。萌もへ芽生える。蠹蝕くしょく木喰い虫が蝕む、虫に喰い荒らされる。禍亂わざはひらん禍と乱れ。英傑えいけつ優れた人物。林則徐りんそくしよ清代の政治家。満清まんしん清國に満ちる、満州族の国家清國。覆轍ふくてつひっくりかえった車の車輪の跡、先に失敗したためし、失敗の先例のたとえ。監かん鑑みる、手本とする、良く看る。宜よしき宜しい。覬覦きぐん身分不相応のことを望み願う。蔑さげすむ蔑視。辦べん弁える。公然こうぜんおおつらに。神孫しんそん神の子孫。天子てんし身体しんたい辱じやく辱、辱め。神祖しんそ天子の祖先。覲然てんぜん平気で人を見る、厚かましい。愧はじ恥。儕さいともがら、仲間。履躡ひんじう人の足を踏み付ける。弊蔽へいへい破れ隠す。蓋けだ思うに、なんぞ。恵王けいおう春秋時代の王。戒いまいめ訓戒。貧夫ひんぷ貧しい男。廉れん恥を知る、潔い。懦夫だふ意気地のない男、だめな男。渴かつ渴く。盜泉とうせん泉の水を盗む。忍しのぶ我慢する。曾參そうさん孔子の弟子、親孝行な人であつた。勝母しょうぼ曾參の母。閭りよ村の入り口、門。還かえす帰す。聖賢せいけん聖人、賢人。蠶食さんしょく蚕のように喰い荒らす。饜えん喰い飽きる。鼓聲こせい太鼓の音。娼妓しょうぎあそびめ、遊女、女郎。俳優はいゆう役者。戲ぎ遊戲、戯れ。飄々ひょうひょう風のふおくさま、彷徨い漂つ。蕩々とうとうとめどがない、ゆらゆらする、しまりがいい、みだす。韓信かんしん漢の高祖の臣、三傑の一人、股潜りで有名。市井しせいまち、市場、人の多く集まる処、庶民の住む処。驅く驅ける。司馬しば周代の官名で陸軍大臣。懿い立派に。司馬懿しばい仲達、西晋の高祖宣帝。拘々くひん拘わるさま、好ましいさま、良いさま。勢焰せいえん炎の勢い。將しやうに正に、当に。滅めつす滅亡、亡くなる。熾し熾烈、盛んなさま。頽たい崩れる。迴かい巡る、廻る。毒焰どくえん悪い炎。煽あお煽動。抑おさも抑、抑える。孔門こうもん孔子の門下。崇あがめ崇拝、敬つ。明辟めいへき明君。愧はじ恥。豐功ほうこう勲功が豊富。盛烈せいれつ烈しく盛ん。千歲せんさい千年。掣肘せいちう邪魔にして人の行動を妨げる。冀きこいねがつ。旋せん周旋、斡旋。恐懼きようくおそれる、畏れかしこむ。

4 贈鹽谷古侯叙

惟文久三年。癸亥春正月監察鹽谷君古侯。將從公駕之京師。其友南部裕。贈之以文。曰。昔者文王之興鴻業也。地方百里。而三分天下。以有其二。其何為而然哉。詩曰。關々鳴鳩。在河之州。窈窕淑女。君子好逑。言先正其家。而後及天下也。然文王固未嘗為得天下。而脩其德也。曰。民吾赤子也。不可使吾赤子凍餒窮乏也。而吾國家。是天之命也。可以忽諸。是以。敬天之至。愛民之深。邇者悅。而遠者服。皇天眷佑。誕受厥命。所謂。至誠感神者乎。固非齊桓晉文輩以力假仁。而僥倖霸業於一時者之比也。孔子稱為至德者。為此之故也。文王既沒。武王周公繼之。以聖人之道。以致郁々之盛。自時厥後。聖王不作。周室日衰。孔子常慨之。欲為東周。及其宰中都。一年而四方則之。何其功之速而大也。孔子不去魯。其王乎。措矣哉。厥後及孟子之時。周道愈衰。孟子憂之。常說時王以王道。曰。雖有知慧。不如乘勢。雖有鐵器。不如待時。々王不唯不能用之。反迂之。故不得行其道於當世。而止矣。亦可惜矣。夫自孔孟沒以來聖人之道益不明。霧霾乎三千年。以至于今日。可勝嘆哉。嗚乎。古侯今日之時。以為何如時耶。比文王之時。為如何耶。孔孟之時。為如何耶。先是。丙午之歲。我公在江都。召晚香鹽先生。々々盛談兵。且

曰。公觀鴻之臺乎。公曰未。先生曰。最可觀者。公之歸也。將觀鴻之臺左右皆以為是奇觀也。至焉則寥寥古址。茫茫荒草而已。人皆瞠若。嗚乎。先生之有望於我公。蓋深矣哉。孟子曰。豪傑之士。不待文王而興。況保尺寸之封。有尺寸之士者。脩文德。施仁義。如文王。則合宇宙。鞭撻九有。豈以為難哉。嗚乎。古侯果知先生之所以有望於我公乎。果知之。則知今之時何如時也乎。嗚乎。今之洋夷。猖獗亦甚矣。今其不攘。天下不出數年。其服左衽。而其言侏儻矣。加之。比歲々豐。而米價如玉。殆不異於大凶荒。如此則不有外患。必有內變矣。而今之天下。真知其可憂者。蓋少矣。凡今之治國家也。剝民肉。而屯民膏。棄仁義。而嚴法令。不過為商鞅李斯刑名法律之奴隸耳。然而自誇於得人焉。所為。則曰。富國也。強兵也。問其富國之術。則曰。填某海。得田何萬頃矣。某地種楮。得利何百鎰矣。於櫪。得何萬金。於漆。得何千金。於酒。於薪。於炭。於布。於木綿。一年之所征。吾不知其何億鎰也。問其強兵之術。則曰。鑄大砲小銃者何千。造利槍長劍者何萬。且命士人。各繕甲兵。其命令之嚴。一國之堅甲。期月而成矣。嚴命士人。學文鍊兵。其督責之急。克勤無怠。國既富矣。兵既鍊矣。器械既備矣。一旦有緩急。何敵不可勝。退而視其民。顏有菜色。口有怨聲。曰。彼大砲我之肉也。彼長劍我之膏也。視其士人。瞋目切齒。曰。賣吾廬。鬻吾器。典妻衣。奪兒服。而漸成此一鑿矣。其在鬻舍之內。講武之場。有司之前。則揚聲誦孔孟。說仁義。揮手舞劍。

怒臂撚槍。足之蹈。合敵聲。頭之搖。合鐘聲。及其歸家。則如飢鳥之逸籠。久囚之出獄。或取竿。釣于水。或提籃。米于山。或說財利。談聲色。口未嘗及名教節義之事也。嗟乎。如此乎。吾未保其不倒戈而賣降也。夫古之所謂。富國強兵者。非此之謂也。散鹿臺之財。發鉅橋之粟。是也。露臺惜百金之費。而數免租稅。是也。不憂漏屋。而喜炊烟之起。是也。書曰。予有臣三千。惟一心。是也。詩曰。赳々武夫。公侯于城。是也。故萬民富於下。則國君安於上。倉廩充于上。則萬民困于下。未有民富而君不富者也。未有國富而兵不強者也。夫國之貧富。在民之窮與否。而兵之強弱。在民之服與否。是故。古之所謂。富國者。非倉廩充府庫盈之謂也。百姓足之謂也。古之所謂。強兵者。非有一二武夫如關張者之謂也。萬民一心之謂也。是以。治國如文王乎。真所謂富國強兵也。然則古侯之事我君。宜如周公且召公奭大公望畢公榮公大顛閔夭散宜生南适之於文武。則富國強兵何難之有。國富兵強。萬民一心。則舉五大州來攻。亦何足為憂也哉。且哉。今之大憂大患。不必在外夷也。駕御失宜。天下之人皆敵也。今之刺貴顯者。不必在櫻田也。有姦而不察。有惡而不知。黨於姦。而私於惡。匕首其在古侯之前乎。然大姦如紫。大惡如莠。奪朱亂苗。最為難辦。古侯熟察諸。嗚乎。所謂大姦大惡。或在士民之中。亦未可知也。古侯熟察諸。其在士民。不知之。猶可也。其在亦未可知也。古侯熟察諸。其在士人。予之知。猶可也。其在屬官。亦未可知也。古侯熟察諸。其在屬官。

不知。不明亦甚矣。而猶可也。其在同僚亦未可知也。其在同僚。不知。則謂之瞽而可矣。古侯熟察諸。夫本正而未正。源清而流清。道之理也。故先正同僚之非。而後及屬官。則屬官亦服古侯之嚴明公正曰。官民之无私也。如此。則一國之人皆曰。古侯之嚴明也。如此。古侯之公正也。如此。我君之得人也。如此。則文王之化。自內而及外。自邇而及遠也。亦不過如此。則是古侯之以古之道事我君也。然則關鵬麟趾之化。行之於今日。亦不為甚難也。嗚乎。

古侯出而在萬里之外。一旦逢犬羊之無禮。則翼我君之神武。以一戰塵之。及其歸也。代我君之明。先察於同僚。而後及屬官。先察於大臣。而後及小民。正本而及末。清源而及流。排姦除佞。以誕發潛德之幽光。是予之所以望於古侯也。裕之於古侯。固非一朝一夕之交。故於其行也。

作詩以戒之。其辭曰。坦々古道。蒺藜塞之。赫々大陽。浮雲蔽之。戒哉古侯。小姦除之。戒哉古侯。小善稱之。明々君明。古侯代之。

時年三十三

釈文

鹽谷しほのや古侯ここうに贈るの叙

惟これ文久三年（一八六三）癸亥きがいの春正月かんざつしおのや監察鹽谷君古侯將に公駕こうがに従いて京師きょうし（京都）にゆく其の友南部 裕
之れを贈り文を以て曰う。昔は文王の鴻業ぶんおふを興す地方を百里を三に天下を分けて以て其の二を有し
て、其の何んぞ為して然るかな、詩に曰う。

關々かんかん鴟鳩しききうは
關々かんかんたる鴟鳩しききうは

在河之州なかす
河の州に在り。

窈窕やうちよう淑女しゆくしよは
窈窕やうちようの淑女しゆくしよは

君子好述くんし
君子の好述たり。

解説 鴟もずと鳩はとの和やかな鳴き声は、河の州なかすに聞かれる。密やかで美しく教養が有つて上品な婦人は、

君子の良き連れ合い（配偶者）となる、の意。

先ず言つ其の家を正しそして後に天下に及ぶなり。然るに文王は固より未だ天下を得るを為すに、嘗みずして其の徳を脩めて曰う。「民は吾が赤子なり」と「吾が赤子は凍餒窮乏に使む可らず」（凍え飢える、衣食にこと欠く）として吾の國家を治める。是れ天の命なり。以て忽諸（忽ち）す可し。是れ以て天を敬つるの至り。民を愛し之れを深め、邇き者の悦びとして遠き者は服う。皇天眷佑（上帝を佑け眷みる）誕りて厥の命を受けて、謂う所、至誠は神に感ずるは固より齊桓晋文を輩とし力を以て仁を假る。倖にして霸業（諸侯の旗頭になる）一時に於て僥す（幸いを願つ）はこれに比べると、孔子は稱して至徳を為すは、これを為す故なり。文王は既に没し、武王周公之れを繼ぐ。聖人の道を以て郁々の盛（文化の香の高いさま）を致す。時に厥の後聖王は作さず、周室日に衰う。孔子は常に之れを慨き、東周を為さんと欲して、中都其の宰に及ぶこと一年そして四方之れに則り、何んぞ其の功は速く大なる。孔子魯を去らず、其の王措おいて矣哉（どうしようもない）。厥の後孟子の時に及び、周道愈いよ衰えて、孟子之れを憂う。常に時の王を説き王道を以て曰う。知慧（身に備わった賢さ）有ると雖も、勢に乗らずに如かず。

鐵器（田を耕す道具）が有り、雖、時を待つに如かず。時の王之れを用うるに能わず、唯だ之れを用うるに能わず。反いて之れを迂け故に其の道當世に於て行うを得ず。止めるや亦た惜む可しや。夫れ孔孟没より以來聖人の道益ます明らかならず。それ以來三千年に雲霧（盛んに雨が降り水が流れる）として以て今日に至り。嘆くに勝る可し哉。嗚乎。古侯今日この時を以て何んぞ時の如くに為なさん耶。文王の時に比べ何んの如きを為さん耶。孔孟の時に比べ何んの如きを為さん耶。先ず是れ丙午の歲。我が公江都（江戸）に在りて、晚香鹽先生を召されて、先生盛んに兵を談る。且つ曰う。公は鴻の臺を觀て公は曰う未だ先生に曰う。最も觀る可し公は歸りて、鴻の臺を觀て將に左右皆以て奇觀（変わった眺め）を為す。ここに至れば則ち寥々（寂しく閑かな）としての古址茫々の荒草已にして人は皆瞠るが若し。嗚乎。先生の望みありて我が公が於て蓋深矣哉（如何んともし難い）。孟子曰く。豪傑の士は文王を待たずして興し況尺寸の封を保つ。尺寸の土は有りて文徳を脩め仁義を施して文王の如し。則ち宇宙に合し鞭撻九有（九流）。豈以て難を為さんかな。

嗚乎、古侯は果す望み有りて、我が公は先生の所を知る、果して之れを知り則ち今この時は何如

ん時なり。

嗚乎、今の洋夷猖獗甚だしき今其れ攘せず天下數年に出ず。其の服左衽にして其の言は侏僂（外国語の意味不明なこと）なり。之に加え比べ歳々豊かなり。米價玉の如く殆んど大凶荒に於て異らず。此の如き則ち外患に有らず。必ず内變に有りや。今の天下眞に其の憂つ可しを知れ蓋して少なや凡そ今の國家を治るなり。民の肉を剝り、民の膏を屯めて、仁義を棄てて法令は嚴しく、商鞅、李斯刑名の法律の奴隸を為すに過ぎず。然るに自から得るに於て誇るを問う。その為す所則ち曰う。富國なり。強兵なり。問う富國の術それ則ち、某海を填て田何萬頃を得る。某地に楮（楮紙の原料となる低木）を種え、利は何百鎰を得る（金貨の重さの単位、二十四兩）。櫨（櫨漆の木）に於ては何萬金を得る。漆に於ては何千金を得る。酒に於て。薪に於て。炭に於て。布に於て。木綿に於て。一年これ征く所。吾が何億鎰なるをそれ知らず。其の強兵の術を問う。則ち大砲や小銃は何千鑄る。利は槍に長剣を何萬と造る。且つ士人に命じて、各甲兵（鎧と甲）を繕う。其の命令の嚴しさ、一國の堅甲（利兵）期月にして成るや。嚴しく士人に命じ文を學び兵を鍊る。其の督責の急克く勤めて怠り無く、國は既に富み、兵既に

鍊り、器械既に備わり、一旦有緩急何んぞ敵に勝る可からず。退いて其の民を視る。顔に菜色有り、口に怨聲えんせいが有り。曰う。彼の大砲我が肉なり。彼の長剣ちやうけんは我が膏あぶらなり。其の士人を視れば目を瞋いからせ齒を切りて曰う。吾が廬ろを賣り、吾が器きを鬻ゆし。妻衣てんを典てん（質入れ）し、児服こふくを奪うばいて漸く此の一盤きんを成す。其れ鬻舎いりや（校舎）の内に在り講武かうぶの場は司の前に有り、則ち聲を揚げて孔孟こうもうに誦なつ。仁義にぎを説き手を揮ふるつて剣を舞う。臂ひじを怒らせて槍ひねを撚ねりて、足之れ蹈ふむ。鼓聲こせいに合せ頭之れ揺ゆぎ、鐘聲しやうせいに合せて其れに及んで家に歸り、則ち飢鳥きちようの籠かごを逸いつするが如し。久しく囚とらえられて獄ごくを出る。或は竿さおを取りて水釣すいちようをして或は籃かごを提たえて山に、米或は財利さいりを説いて、聲色こころいろを談る。口には未だ名に及んで嘗じやうみず教節義きやうせつぎの事。

嗟乎ああ。此の如き吾れ其の戈ほこを未だ倒さずまた保たず降して賣り。夫れ古の謂所は富國強兵之れ謂いうところ非らず。鹿の臺に財を散じ、鉅橋きよきやうの粟しよくに發つかす。露臺ろたい百金の費おしを惜おしむ、數々ばいばい是れ租税そぜいを免まじて漏屋ろうおくを憂うれえず、炊烟すいえんの起るを喜び是れ書して曰う。予は臣三千有りて是せり。詩に曰う、
「きやうきやう 起々の武夫ぶふ、公侯こうこう于城じやう」是れなり。故に萬民ばんみん富下に於て、則ち國君安上に於て倉廩そうりん（米倉）干上かんじやう

(盾)に充て、則ち萬民干下(盾)に困しみ、未だ民は富むに有らずして君も富まずなり。未だ國富まずして兵は強からず。夫れ國の貧富は民の窮否とに在り。兵の強弱民の服と否とに在り。是れ故に古の謂所富國は倉廩を府庫に充て盈てりてこれ謂うに非らず。百姓足りて之れを謂うなり。古の謂所の強兵は一二の武夫有るに非らず關張の如くは之れを謂うなり。萬民一心之れを謂うなり。是れ以て國を治めて文王の如き眞に謂所富國強兵なり。然るに則ち古侯之れ我が君の事、宜く文武に於いては周公且つ召公奭、大公望畢し公榮公、大顛閼は天くして散じ宜く生きる南宮适(魯の人、孔子の弟子)の如く則ち富國強兵何んぞ難きの有り。國富兵強萬民一心則ち五大州擧げて來攻亦た何んぞ(一本足)を為すに足らん、且つまた今の大憂大患外夷在りて必ずとせず。駕御宜失す天下の人皆敵なり。今之れ貴顯刺す櫻田に在り必ず姦(心がねじて正しくない)は有るを察せず。惡有りて黨を知らず。私に惡に於ては首其れ古侯の前に在る。然るに大姦索す如く大惡は莠(莠、臭い草、善に似て實は正しくない)の如く、朱を奪い苗を亂す、最も辨じ難しさを為す。古侯熟して諸を察し、

嗚乎。謂所大姦大惡或は士民の中に在り。亦た知る可からざり、古侯熟し諸を察し其の士民に在

り知らず。猶可^よしなる。其の士人在り亦た未だ知る可からざり。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して其の士人に在り。之れを知了猶可^よしなり。其の屬官^{しよくかん}在り亦た未だ知る可からざり。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して其の屬官^{しよくかん}在りを知らず。明らかにせず亦た甚だしきかな。そして猶可^よしなり。其の同僚^{どうりょう}在りてこれを知らず則ち之の警^{めい}を謂^いう可^いし。古侯^{ここう}熟^{じく}して諸を察して夫れ本を正し、源を清して流れは清し道の理なり。故に先ず同僚^{どうりょう}の非を正して後に屬官^{しよくかん}に及び。則ち屬官^{しよくかん}亦た古侯^{ここう}に服しこの嚴明^{げんめい}公正^{こうせい}曰^いう。官民之れ私にせずは此の如し。則ち一國の人は皆曰^いう、古侯^{ここう}の嚴明^{げんめい}なりを此の如し。古侯^{ここう}の公正^{こうせい}なりを此の如く。我が君の人を得るなり此の如く。則ち文王の化す内よりして外に及ぶ。邇^{ちか}くよりして遠く及ぶ亦た此の如きに過ぎんずば、關鵲^{かんけん}麟趾^{りんし}（子孫に賢人の多い例え）の化之れを今日に於て行^いう亦た甚だ難きを為さず。

嗚乎、古侯^{ここう}出で萬里の外に在りて、一旦犬羊の無禮^{ぶれい}に逢^あつ。則ち我が君の神武^{じんむ}翼^{よく}以て一戰之れを塵^みにし、其の歸るに及ぶなり。我が君の明に代つて先ず同僚^{どうりょう}より察して後に屬官^{しよくかん}に及び。先ず大臣より察して後に小民に及ぶ。本より正して末に及ぶ。源を清くして佞^{よこしま}を除き姦^{かん}を排して流れに及ぶ。

以て潜徳せんとくの幽光ゆうこうを誕發たんぱつさせて。是れ予め之れ古侯ここうより以て望む所なり。裕ゆたかの古侯ここうに於て固もとより一朝
一夕の交に非らず。故に其の行いに於て、詩を作りて以て之れを戒め、其の辭に曰う。

坦々古道

たんたん ことつ
坦々たる古道

疾藜塞之

しつれい ふさ
疾藜之れを塞ぐ

赫々太陽

かくかく
赫々たる太陽

浮雲蔽之

ふうん おお
浮雲之れを蔽う

戒哉古侯

いましめ かな ここう
戒る哉 古侯

小姦除之

しょうかん
小姦 之れを除く

戒哉古侯

いましめ かな ここう
戒る哉 古侯

小善稱之

しょうぜん これ
小善 之を稱す

明々君明

めいめい くんめい
明々の君明

古侯代之
古侯 之に代る

時年三十三歳

語釈

鹽谷古侯しおんここう＝鹽谷鼎助、岩国藩士、藩校養老館で五竹より五歳年長、惟い＝これ、おもつに。癸亥きがい＝元治元年、一八六三。監察かんさつ＝諸官吏の違法を取り締まり、地方官庁の行政状態を視察して廻る官。公薦こうけん＝公の薦薦、参勤交代で諸侯の乗る薦薦。京帥きやうしう＝天子の都、京都。文王ぶんわう＝周代の聖王。鴻業かうげふ＝帝王の大業。關々かんかん＝鳥の和やかな鳴き声。鵬鳩ほうこう＝百舌と鳩。州す＝川の州、川の中に土砂が堆積して小嶋のようになった所。窈窕淑女ようてうしよふ君子好述とある、窈窕宮殿などの奥深いさま、淑女女の淑やかで美しいさま。君子くんし＝才徳の在る人。好述こうしよ＝好く述べる。脩める＝修める。凍餒とうじやう＝凍り飢える。窮乏きやうふ＝乏しく困窮。邇じ＝近い、近く。皇天かうてん＝大いなる天、天の敬称、天帝、上帝。眷佑けんゆう＝振り返って助ける。誕たん＝大いに。厥命くわくめい＝その命令。齊桓晋文さいくわんしんぶん＝春秋時代齊の桓公、晋の文公共にこの時代の五人の覇者の中。輩はい＝輩。所謂しいうゐ＝何を言いたいか、それだから。假にかり＝仮に。霸業はくげふ＝王と成る為の戦い。僥倖かうじやう＝思いがけない幸せ、これ幸い。孔子くんし＝儒学の始祖。至徳しとく＝至つて徳のある人。郁々いくいく＝香気の盛んなこと。厥後くわくご＝其の後。聖王せいわう＝聖帝、聖天子、優れた天子。武王ぶわう＝殷を滅ぼして周王朝を建國下天子。周公くわうくわう＝武王の弟で摂政として周の制度を創立二代目の成王を補佐した。聖人せいじん＝知徳の優れた最高的人格者。周室しうしつ＝周の王室。慨がい＝嘆く、嘆息。東周とうしう＝前四〇三より前二五六。中都ちゆうと＝宰さい＝司る、治める。魯ろ＝孔子の生まれた國。孟子もうし＝周の時代の指導者、孔子の後を継いで、其の説を發展させた、四書。周道しうたう＝周の政治。愈ゆ＝いよいよ。衰すい＝衰える。時王じわう＝時の王。王道わうたう＝王の執るべき道。知慧ちゑ＝英知。雖いふとも＝けれども、これ、もし。鉉器じやうき＝鋤、鋤、田畑を耕す道具。迂反ゐはん＝曲がり反する、回り道。當世たうせい＝此の世、今頃。孔孟くうもう＝孔子と孟子。聖人せいじん＝聖者。霽はらひ＝霽、盛んに雪が降る、霽、大風が土砂を巻き上げる。古侯ここう＝鹽谷鼎助、語源は漢の昭平は元素の東陵公であったので古侯ここうという、彼が秦の滅亡後庶民となり長城の東で瓜を植えて貧しい生活をしていたこと。丙午へいご＝弘化四年、一八四六。歳とし＝年。江都かうと＝江戸。

香鹽先生＝鹽谷鼎助、古侯。鴻之臺＝観る＝見る。奇観＝壯観、珍しい、不思議な眺め。寥々＝寂寥、寂しい。古址＝古跡。茫々＝広々としているさま。荒草＝荒れ草。瞠若＝驚き呆れ目を見張る。蓋＝思うに、むしろ、なんぞ。豪傑＝才知が衆に優れた人物。武勇が人に優れた人物。況＝まして、まして、ここに、ありさま、近況。文徳＝礼樂、礼節と音楽によって人々を心服させる徳、文教や学問による徳。脩め＝修める。仁義＝仁、親愛の心と義、道理に合うこと、道德の総称。宇宙＝四方上下と古今、宇は空間、宙は時間。鞭撻＝むち打つ、励ます。猖獗＝勢いが盛んで、荒れ狂う。攘う＝打ち払う、追い払う。左衽＝左衽、おくみ。侏儒＝中国西方の蛮人の音楽転じて外国語の意味、不明なさま、べちゃくちや。歳々＝年々。豐＝豊かに。大凶荒＝大変に穀物が実らない凶作、不作。外患＝外国から攻められる災い。内變＝内憂、内乱。米價＝米の値段。玉＝宝玉、真珠等。棄て＝棄却、捨て。法令＝法律と命令。商鞅＝姓は公孫、名は鞅、秦の孝公に仕え、於、商の地に封じられたので商鞅、商君とも言つ、秦の法律や土地制度を改め刑罰を厳しくした。李斯＝秦の政治家。刑名＝刑名學という学説、刑罰の名。法律＝標準となる定め、してはならない掟。奴隸＝下僕、奴昔戦争で捕虜になつたり、競馬杖尾受けたり、売買されて、自由を認められず強制労働させられ他人。富國＝国力が益こと。強兵＝軍備が増大する。膏＝肉と脂。屯＝屯、なやむ。填＝埋める、充填。頃＝半歩、歩幅の単位。楮＝楮、和紙の原料。鎰＝金貨の単位、二十両、一説に二十四両との説もある。櫛＝黄櫛、櫛、漆、果実から蠟をとる。利槍＝槍の方が利。長劍＝長い劍。甲＝鎧、甲。繕う＝修繕。鑄＝鑄物。督責＝監督、督促の責務。一旦有緩急＝一度國に大事が起るならば。菜色＝青菜の色、青い顔を。怨聲＝怨む声。彼長劍＝あの長劍。我の膏＝自分の血と脂。目を瞋齒を切＝眦をあけて齒ざしり、怒り目を剥き齒をくいしばる。廬＝家。鬻＝粥、売。妻の衣典＝典、質入れすること、妻の着物を質入れすること。漸く＝やっと。一壺＝鬻舎＝学舎、學校。講武＝武術の道場。司＝司る、上司。孔孟＝孔子と孟子。手揮い＝手を揮い。臂＝肘、肱。燃る＝燃る。鼓聲＝太鼓の音。揺り＝揺り。鐘聲＝鐘の音。飢鳥＝飢えた鳥。囚＝囚われる。籠＝籠。逸す＝逃げる。獄＝牢獄。水釣＝川で魚を釣る。籃＝魚を入れる籠。提げ＝提げて、持つ。竿＝釣り竿。聲色＝声を似せて。名教＝名分に関する教え、道德上の教え、聖人の教え、儒教の教え。節義＝節操と道義。嘗て＝嘗める、試みる、かつて、以前。嗟＝嘆き悲しむ声。戈＝矛、鉞、鉞。鹿臺＝鉅橋の粟＝殷の紂王の米倉の名。露臺＝天子の天文觀測の台。租税＝人民が収

入の一部分を政府に強制的に収めさせられるもの、年貢。免れ＝免除。漏屋＝雨の漏る家、あばら屋。憂えず＝憂いに思わない。
炊烟＝炊事の煙り。起々＝逞しい、勇ましいさま。武夫＝武士。武人。公侯＝爵位で公と候、身分の高い人。萬民＝人民、全てに国民。倉廩＝米倉。
府庫＝政府の倉庫。盈＝満ちる、充ちる、孕む。百姓＝農民。關張＝關羽と張飛。周公＝文王の子で武王の弟。召公奭＝周公と協力して成王を助け周王國を發展させた。大公望＝太公、父のこと、周の文王の賢臣呂尚を言う、呂尚が渭水の岸で魚釣りをしていたとき文王がみだし、我が太公が（父）待ち望んでいる人物だと喜び、太公望とよんだ、武王を助け殷の紂王を滅ぼし功によって齊の封じられた、転じて魚釣りを州流人、釣り好きな人。畢＝悉く、みな、終わる。公榮公＝大顛＝天散＝若くして死ぬ。宜く＝良い。南适＝孔子の弟子南宮适。文武＝文王と武王。大憂＝大きな憂い。大患＝大きな患い。駕御＝駕籠に乗る。貴顯＝身分が高く有名なこと。匕首＝匕首、短刀。大姦＝大悪人、心が拗けて正しく。紫の如し＝心が紫黒に熟＝好く考える、じつくりと。諸察＝諸諸のことを監察。櫻田＝桜田門の變。姦＝邪、淫ら。姦黨＝邪、淫らな徒党。莠＝はぐさ、水田に生え稲を害す、見た目は良くて実は有害なもの。大惡＝大悪人。屬官＝官吏。同僚＝仲間、友人。瞽＝目の不自由な人。嚴明＝厳しく明朗。公正＝公平で正しい。神武＝天子の先祖。翼＝輔翼、助ける。鷹＝皆殺し。佞＝阿る、諂う。誕＝大いに。潜德＝徳を包み隠す、世に知られない美德。幽光＝幽玄な光。裕＝五竹。行＝儒学の行。邇＝近い、近く。關關＝關關、百舌が鳴く。麟趾＝麒麟の跡。坦々＝平坦なさま。古道＝古い教え、道。疾榮＝はまびしを象った鉄又は木の武器。赫々＝赤い、明るい。浮雲＝浮き雲。戒＝訓戒。小姦＝小悪党。小善＝小さな善。明々＝明らか、明白。

予讀駿臺雜話。至其說離騷。喟然而嘆曰。善矣哉。鳩巢翁之說離騷也。誠如是乎。天下無為不善者乎。其言曰。離騷之要。在篇端數語。曰。帝高陽之苗裔兮。朕皇考曰伯庸。是言也。與六朝士大夫之誇門地。日本武夫之呼王孫者。大不同也。凡人之為不善。為忘祖先父母之故也。屈子以為。身以帝高陽為鼻祖。而以伯庸為皇考。為善人良家之後。則其言之惡。可以辱祖先父母。不獨身也。故一行。顧其祖。一言。思其親。忠孝之意至矣。予也。生蠻夷猾夏之時。其懷大耻。不獨原一身之不幸也。常以為。予也雖微。亦神州之民也。神州之民。而誰非神聖之苗裔者。然則貌焉。吾身。亦不可不重焉。每思洋夷之猖獗。不覺涕泗交頤。嘆曰。嗚乎。今日之時。何如時耶。姦人誤國。使犬羊坐大。宸衷之苦楚。其何如哉。為之臣子者。恬然坐視之時哉。而今也。神州之民。神聖之苗裔。而服夷之服。法夷之法。名夷之名。屈膝犬羊。師之。甘為腥羶之奴隸者。滔々皆是。吁。是何心哉。其無義無恥。一至于此乎。使其少知屈子之心。恥辱一身之為辱神祖。辱一身之為辱神州乎。則其無羞惡之心。或不至于此矣。昔者孟子之賢闢揚墨。不免好辨之名。予之不佞。尊天朝而抑夷狄。誦孔子之法於衆楚之間。人不以為狂。則以為妄。其苦心。比原何如也哉。嗚乎。

鳩巢翁。生千載之後。深知原之心。原也得知己矣。予也生于千載之後。其心與原諳合。原也邈矣。翁也逝矣。吾誰與語其胸懷哉。嗚乎。

此篇係三十四五歲作

釈文

駿臺しゅんだい雑話ざつわを讀むよむ

予「駿臺しゅんだい雑話ざつわ」を讀むよむ。其れ離騷りせうの說に至る。喟然きげん（嘆息）して嘆きて善きかな。鳩巢翁きゅうそうおう（駿臺しゅんだい雑話ざつわの著者）

離騷りせうの說は誠まことに是れ如く、天下てんかに不善ふぜんを為す者は無しの言に曰う。離騷りせうの要は篇端へんたんの數語すうごに在りて、

帝高陽みかたかひやう（太古みかたの天子てんしせんぎよくのこと）の苗裔びやうえい（遠い子孫）朕考ちんこう伯庸はくおうの曰くには。是の言は六朝ろくちやう士大夫しだふこれ門地もんち

に誇りほこ。日本武夫やまとたけるの王孫おうそんと呼び大同だいたうせず。凡人ふぜんの不善ふぜんを為す。祖先父母せんそふぼの忘れを為すは之れ故なり。

屈子くつし（屈原）以て為す。身は帝高陽みかたかひやうを以て鼻祖びそ（第一の子孫、最初に物事を始めた人）と為す。そして伯庸はくおうの皇考けいこうを

為す。善人良家の後に為す。則ち其の言行の悪しきは祖先父母せんそふぼを辱はづかしめ以てす可し。獨り身にせず故

に一つの行ないは其の祖を顧る。一言其の親思つ忠孝の意至りる。

予は蠻夷夏を猾すの時に生れ。其の大耻（大きな恥）を懷う。獨り原子一身の不幸にせず常に以て為す。

予なり微なりと雖も亦神州の民なり。神州の民にして誰が神聖の苗裔に非らず。然るに則ち藐んじ

ある吾身亦重からず可かざる。洋夷の猖獗（勢いが盛んで荒れ狂う）を思つ毎に涕泗頤を交も覺えず。嘆い

て曰う。嗚乎。今日この時何如なる時ぞ。姦人（心の邪な人）國を誤り。犬羊坐大に使して。宸衷（天子

の心の中）の苦楚其れ何如ばかりかな、この臣子為すは恬然（のんびり平気で）坐視の時なるかな。今神州の民

神聖の苗裔夷の服を服て、夷の法を法り夷の名を名して、膝を犬羊屈して、この師いるに甘んじて、

腥羶の奴隸を為す。滔々（盛んに乱れるさま）吁（嘆き疑う）是れ何たる心かな。其れ義無く恥無く一にここに

至る。其れ少しでも屈子の心を知れ。一身之れ神祖の辱しめ為す。一身の辱しめを知れ、之れ神州

の辱しめを為す。則ち羞惡の心無し或は至らず、昔者孟子の賢さ闢揚墨。之の辨えを好く免れず。

予は之の不佞天朝を尊び夷狄抑も、孔子の法を誦えて衆楚に問う。人は以て狂と為して為ざる。則

ち妄を為して其の苦心原子に比べて何如や。嗚乎。鳩巢翁千載の後生れ。その心深く原子の心を知

り。原^{げん}しなりを己に知り得る。予^よまた千載^{せんざい}の後に生れ。其^{その}の心原子^{げん}と諳^{かた}り合^あわん。原子^{げん}また邈^{はる}かなる。
翁^{おきな}また逝^ゆく。吾^{われ}れ誰^{たれ}とともに其^{その}の胸懷^{きょうかい}を語^{かた}らんかな。嗚^あ乎^あ。

(此篇三十四、五歳)

語釈

駿臺雜誌^{しゅんたいしじ}書名、五卷、江戸時代の儒者、室鳩巢の著、儒教中心の道德、政治、文学に関する随筆。離騷^{りせう}楚辞^{しじ}の編名、戦国時代、楚の

屈原^{くわん}が王に信任されない憂いを述べたもの、離は確、騷は憂いで憂いにあうという意、いっせつに追放され國から離れる憂いを述べたものという。喟然^{きぜん}

「嘆くさま。鳩巢翁^{きうそう}」江戸時代の儒者、室鳩巢。不善^{ふぜん}「善でない、悪。端数^{たんすう}」半端な数。帝高陽^{ていこうやう}「太古の天子黄帝の孫で高陽國を建てたので高陽氏と

いう。苗裔^{びようい}」遠い子孫。兮^{けい}「主語や文の後につけて感嘆や強調の語氣を表す助字。朕^{ちん}」天子が自分のことを指す。皇考^{かう}「天子の亡くなった父、先代。

伯庸^{はくよう}」皇考。六朝^{りくちう}「三国時代の呉および南北朝時代の南朝の東晋、宋、齊、梁、陳の六王朝。大夫^{だいふ}」周代、天子、諸侯に仕えた官吏の身分の一つ。門地^{もんち}

「家柄、家格。誇る」誇り、誇示。日本武夫^{にっぽんぶふ}」王孫^{おうそん}「王の孫、王の子孫。屈子^{くつし}」屈原をいう。鼻祖^{びそ}「第一の先祖、始祖、元祖、最初に物事を始めた人。

善人^{ぜんにん}」良い人。良家^{りやうけ}「良い生活をしている家庭、家柄の良い家庭。辱め^{はづかし}」屈辱。顧る^{かえりみ}「振り返る。忠孝^{ちゅうこう}」忠義と孝行。蠻夷^{ばんい}」野蛮な夷狄。猾^{かつ}」狡

猾、悪る賢い。原^{げん}」屈原。微^び」微禄。僅か、微小。雖^{いえども}「けれども、たと。神聖^{しんせい}」人格の完全無欠なこと、後世時の天子を称えることは。貌^{ぼう}」姿形、

小さくて幽かな。洋夷^{ようい}」西洋の夷狄。猖獗^{しやうけつ}」勢いが盛んで荒れ狂う。涕泗^{ていし}」涙とともに鼻水がでる。頤交^{いこう}」頤をしゃくりあげて、泣く。恬然^{てんぜん}」平気な、

平然。坐視^{ざし}「坐って視る、何もしない。姦人^{かんじん}」心の邪な人、悪者。犬羊^{けんやう}」西洋人の蔑称。宸衷^{しんちゆう}」天子の苦衷。苦楚^{くそ}」苦しみむち打つ、楚、荊、にんじ

ん木、杖、むち打つ、昔師は弟子を訓戒するのになんじんぼくの杖を用いた。腥羶^{せいぜん}」生臭い、西洋人。奴隸^{どれい}」僕、下男、昔戦争で捕虜になったり、刑罰

を受けたり、売買されたりして、自由を認められず、強制労働させられた人。滔々とうたう水の勢い良く流れるさま。神祖しんそ偉大な功績のある先祖。天照大神の尊称、江戸時代、徳川家康の尊称。吁う感嘆詞。孟子もうし孟浩然、盛唐の詩人。賢けん賢人。揚墨ようもく戦国時代の思想家、揚朱と墨翟。關かん拓く、拓ける。辦べん弁える、弁じる。羞惡しうゑく自分の悪い点を恥じ、人の悪い点を憎む。佞でい阿る、諂う、邪、口がうまい。天朝てんちよう天子の朝廷。夷狄いてき外国人。抑よく抑留、抑える、抑も。孔子こうし儒教の始祖、春秋を著わしたと伝えられる。衆楚しゅうしゅ多くの人を、むち打ち訓戒した。誦しよ唱える。千載せんざい千年。知己ちぎ自分の心や値打ちを良く知ってくれる人。親友、知友。誼合あたいごう暗唱し合う、十分に心得る、熟達している。邈ぼう遥かに遠い、侮る。逝ゆく、逝去、死ぬ。胸懷きょうかい胸の思い、心の中、胸襟。

6 尊攘社人名錄序

恭惟。我神州天日之嗣。世御宸極。萬古無革命。而開闢以來。未嘗受外夷之侮也。及先帝之時。西荒蠻夷。數窺我邊。敢朶頤乎我神州。何夫無禮之甚也。先帝。天資英邁。聰明絕倫。乃洞燭彼奸。深慮堅冰之漸。因下攘夷之勅。當此之時。幕府無人。怖犬如虎。遂聽洋夷之請。或許互市。或建邪教寺。或將軍親與醜夷對座。請其參國政。甚則至於欲名神州以新亞墨利加。國家之污辱。醜夷之跋扈。其亦甚矣。當此之時。大小諸侯。頗唱勤王者有之。就中。如宗藩。上下盡忠以攘夷為事。先帝亦深依賴焉。既而宗藩再攘外夷。以慰先帝之宸衷。天下之人。於是乎。稍展眉稱快。嗚乎。殫血未乾。而小人間之。惜哉。於是乎。藩宗之志蹉跎。而先帝之志不成。無何。帝亦崩殂。豈非千載之遺憾耶。爾來大小列侯。無唱尊攘者。擁重兵。座而視犬羊之猖獗而已。於是。外夷亦益無忌憚之色。而今則胡兒橫行於華庫之地。腥羶之氣。殆遍輦轂之下。而無一。人有誰何者也。於是。外夷之勢焰日熾。而神州之士氣益不振。日甚於一日。故號稱武士者。唯夷狄是學。優孟衣冠不啻。以日本之刀。換洋夷之銃。以先王之禮服。換左衽之胡服。搥戎狄之鼓。學戎狄之陣。其心化為夷狄者。亦已半於天下矣。嗚乎。士氣之衰弱。外夷之猖獗。至今日而極矣。此

誠危急存亡之秋也。今而不救。神州其夷乎。夫喬木既蠹。而大風將至。内地半夷。而外夷方驕。將軍不攘之。列侯不膺之。天下英雄豪傑之士。亦袖手而旁觀。則神州之為外夷之有。將在近也。嗚乎。若舉祖宗之天下。座付犬羊之手。神祖先帝在天之靈。其謂之何。苟為之臣子者。豈旁觀座視之時哉。嗚乎。今之西洋者。不獨戎狄也。覬覦國家之大賊也。則非國家之大讐耶。然則人々當懷敵愾之心。而不可與共載天也。予也。慨乎外夷之陸梁也久矣。頃者頗得同志之士。日夕相會。講尊王之道。議攘夷之策。號曰尊攘之社。庶有觀感而興者。相俱戮力。以攘斥外夷。一洗羶風。以救神州之陸沈。則是上以繼先帝之志。中以承宗藩尊王攘夷之旨。下以奉吾君尊王攘夷之意。而行聖人尊王攘夷之大道正訓於今日也。其成與不。則在吾人所為何如耳。可不勉哉。慶應三年丁卯。夏五月。南部裕序

時年三十七

釈文

尊攘社人名録序
そんじょうしゃじんめいろくじょ

恭しく惟おもつ、我が神州天日からの嗣つぎきにして、世は御宸極ごしんきよくにおいて革命は萬古に無く、しかも開闢かいびやく以

來未だ嘗て外國からの侮あなどりを受けたことはなかつた。先帝せんていの時に及び西荒蛮夷せいこうばんいが我が邊あたりを數窺しばしばうかがうようになり、敢えて我が神州に朵頤だいたいするようになる。何ぞ夫れ無禮の甚だしきことなり、先帝は天資英邁にして聰明絶倫なり、彼の奸かんはそこで洞どうに燭しよくし、堅氷もこれ漸く深く慮おもんばかるようになり、因つて攘夷の勅が下された。此の時に當り幕府に人無く、犬を怖る虎の如く遂に洋夷の請こつを聴き、或いは互市を許し、或いは邪教寺じやくきょうしを建て、或いは將軍親く醜夷たういと對座して國政に参ずるを請こう。甚だしきはここに到りて、神州を以て新亞墨利加の名に加なさんと欲す。國家の汚辱醜夷おじよくしゆいの跋扈はつこそれまた甚だしきや、此の時に當り大小の諸侯、頗すこぶる勤王きんのう唱る者これ有り、ことに宗藩そふはんの如き上下忠を盡して以て攘夷じやういの事を為す。先帝亦た深く依頼され、既に宗藩をして再び外夷はういを攘はらう。以て先帝の苦衷を慰め天下の人ここにおいて稍しやうやく眉まゆを展のぶ。嗚乎、快なるを稱える。羶い血は未だ乾かずして小人これ間に惜しずむ、宗藩そふはんの志しは躡おき時機を失なつ。先帝の志しは成らず、可べし無く、先帝亦た崩御される。これ千年に一度有るや無しの残念なことである。それ以来大小の列侯尊王攘夷を唱える者無く、兵をを重ねて擁ようし、座して犬羊の勢力が盛んで荒れ狂うを已に視る。是れに於て、外國の夷亦た益々

遠慮の色無く、今則ち胡兒は華庫かこの地に於てわが物顔で行き来する。腥羶えんにちさかの氣、殆ど天子の乗り物の下に逼る。そして何者が誰か有る一人も無く、是れに於て外夷の勢い焰日熾えんにちさかになる。しかも神州の士氣益々振るわず、日一日於て甚だしく故に武士は號稱する唯だ戎狄是れに學び、優孟衣冠ゆうもういかんし畜せず、日本の刀を以て洋夷の銃と換え、先王の禮服を以て左衽の胡服に換える。戎狄の鼓を搗ち、戎狄の陣に學び其の心は化して夷狄者いてき為す。亦た已に半ば天下に於いて、嗚乎、士氣衰弱し外夷の猖獗しょうけつは今日に至りて極まる。此の誠は危急存亡の秋なる。今にして救わずして神州は其れ夷かな、夫れ喬木きようぼく既に蠹むしくいとなる。そして大風至りて將に内地の半ば夷そして外夷は方に驕る。將軍これを攘はらはず、列侯これを膺うたず、天下の英雄豪傑の士、亦た手を袖にして旁觀。則ち神州の為に外夷これ有り。將に近くもに在るを將つて、嗚乎、祖宗の天下を擧げずに座して犬羊の手を付して、神祖先帝天の靈其のこれ何かんと謂う。苟もこれ臣子を為す者は、豈旁觀座視の時哉。嗚乎、今の西洋の者は獨りならず戎狄なり。覬覦きゆ國家の大賊なり。則ち國家の大讐に非らず耶。然れども則ち人々の敵愾てきがの心を懷なげうに當り、なり夫れは天に載せて共に与するは可からずなり。ここにまた嗚呼、外夷の陸梁りくりようを慨なげきて久

しきかな、頃者同志の士頗る得たり。日夕相會して、尊王の道義を講る。攘夷の策號して曰く、尊攘の社。庶ろ觀感して興ず者有り。相い俱に戮力以て外夷を攘斥し、羶風を一洗して以て神州の陸沈を救わん。則ち是の上先帝の志を繼がん。中に宗藩の尊王攘夷の旨を承り下して以て吾が君の尊王攘夷の意を奉らん。そして聖人尊王攘夷の大道正訓を今日より行つ也。其の成ざるとも。吾人の所に在りて何如を為すのみ。勉むる不にに可からず哉。慶應三年丁卯。夏五月。南部裕序

時年三十七

語釈

尊攘社そんじょうしや 五竹ごちくが尊王攘夷そんわんじょういの同志との結社名 人名録じんめいろく 名簿なぼ 序じょ 文章の初めに。恭惟きやうい 〝うやうやしく思う。天日の嗣し 天照大神よりの嗣、天子。宸極しんきよく 天子の居所、またその位。世御せいぎよ 在位の世。萬古ばんこ 万年もの昔。太古たいく 革命かくめい 天命を改める、王朝が変わること。開闢かいびやく 天地の開け始め、世界の始まり。嘗て 以前、前に。先帝せんてい 先の帝、孝明天皇。宸衷しんしゅう 天子の苦衷。西荒せいかう 西洋人の荒れ者。蠻夷ばんい 野蛮な夷狄。窺き 窺う。敢かん 宛にする、妄りに、勇ましい。朵頤たいい 頸を下げて物を喰うさま、朶た 木の枝、動かす、頤い 天資てんし 生まれつき、天が人に授けた性質、天性てんせい 英邁えいまい 才能、知識の非常に優れてること。聰明そめい 聴いたり見たりすること、耳や目が聡いこと、道理に明いこと。絶倫ぜつりん 人なみ外れて優れている。奸かん 侵す、乱す、邪。洞燭どうしやく 洞窟の中の蠟燭、仄かな明かり。堅氷けんひょう 堅い氷。漸ぜん 漸く。深慮しんりょ 深い考え。攘夷じょうい 夷、狄、戎、胡、を追ひ払う。勅ちやく 勅語、詔。互市ごし 市場、貿易。邪教寺じやくきやうじ 基督教會。醜夷しうい 外国人を蔑視した語。對座たいざ 対面して坐る、對等に。新亜墨利加しんあめりか 新アメリカ。心懷しんがい 心に思ふこと。汚辱おじよく

汚し辱める。跋扈はつこ＝手強くて我が儘に振る舞う、のさばる、横暴。頗すこぶる＝屢々、頻りに。勤王きんのう＝王室に忠勤を励む。中就なかんずく＝たくさん在る物事の中でもとり分けて。宗藩そうはん＝萩藩、長州藩。殫血たんけつ＝生臭い血。稍眉しょうめい＝稍や眉を。蹉跎さだ＝躓き時期を失う、不幸せて志を得ない、思うに任せない。崩殂ほうそ＝帝の殂落、書舞典より、崩御。千載せんざい＝千年。豈あに＝どうして、なんと、それ。遺憾いがん＝恨みを遺す、残念。気の毒。爾來じらい＝これ以来。尊攘そんじやう＝尊王攘夷。重兵じゅうへい＝火器を備えた兵。擁ようし＝抱える。猖獗しやうけつ＝勢いが盛んで荒れ狂う。忌憚きたん＝忌み憚る、遠慮する。華庫かこ＝横行おつう＝我が物顔で行き来する。腥羶せいせん＝生臭い。勢焰せいえん＝火焰の盛んな勢い。熾し＝熾烈、激しい。輦轂れんこく＝天子の乗用車。逼ひつ＝逼迫、指し迫る。優ゆう＝優れる。孟もう＝孟子。衣冠いかん＝衣服と冠。正しい装束。畜し＝ただ、ただに。先王せんおう＝先帝、孝明天皇。禮服れいふく＝儀式の時に着る服装。左衽さてん＝左衽、おくみ。胡服こふく＝洋服。戎狄じゆうてき＝西洋人。鼓こ＝太鼓。搗た＝打つ、叩く。半ばなか＝半分。猖獗しやうけつ＝勢いが盛んで荒れ狂う。危急存亡ききんそんぱう＝危うくて差し迫っている、極めて危うく存続するか滅びるかが決まる大事なとき。秋と＝時、時期。喬木きやうもく＝大樹、松杉檜等の高木。蠹こ＝木喰い虫。方あた＝今や、丁度今、本当に。驕きやう＝驕慢、驕る。攘はち＝打ち払う。膺よう＝胸、受ける、征伐する。英雄えいゆう＝才能、武略の非常に優れた人、英傑。豪傑ごうてつ＝才知が衆に優れた人物、武勇が人に優れた人物。旁觀ぼうかん＝傍らで観ているだけ。座視ざし＝何もしないで坐って視ているだけ。覬覦きぐ＝身分不相応なことを臨む。大讐たいしやう＝大きな敵。讐き＝ため息、敵愾心、慨がい。陸沈りくちん＝陸地に沈む、人が世の中で姿を隠していること、世が乱れ亡びること。陸梁りくりやう＝暴れて走り廻ること。慨がい＝嘆く嘆息、憤る。丁卯ていぼう＝慶応三年、一八六七。南部裕ななべゆう＝南部五竹。尊王攘夷そんじやうりやい＝王室を尊び且つ夷狄を攘らう。